

Title	コンラッドとアナキズム
Author	横山, 徳爾
Citation	人文研究. 33 卷 5 号, p.330-341.
Issue Date	1981
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

コンラッドとアナキズム

横 山 徳 爾

コンラッド (Joseph Conrad) は、『ノストローモ』 (*Nostramo*, 1904) 完成後、1905年から1906年にかけて、『海の鏡』 (*The Mirror of the Sea*) と題する船員時代の思い出 ('sea sketches') を綴った文章や、のちに『チャンス』 (*Chance*, 1913) として完成される長篇を執筆していたが、同時に、いくつかの短篇小説を書いている。そのなかには、のちに『六つの短篇』 (*A Set of Six*, 1908) に収録される「無政府主義者」 ('An Anarchist', 1906) や「密告者」 'The Informer', 1906) がある。さらに、1906年11月に完成される『密偵』 (*The Secret Agent*, 1907) も進行中であつた。「無政府主義者」、「密告者」および『密偵』、さらに数年のちの『西欧の眼のもとに』 (*Under Western Eyes*, 1911) は、いづれもアナキズムにかかわる作品であり、19世紀末からロシア革命に至る数10年間において、しばしばテロリズムによって世間の耳目を驚かせた当時の革新思想に対するコンラッドの嫌悪と軽蔑を明瞭に読みとることができる作品である。

コンラッドは、『密偵』の「作者の序文」において、自分がアナキストやアナキスト運動について直接知っているのではないことを明確に述べて、この作品の成立の発端について、次のように語っている。

『密偵』の主題 (物語という意味) は、アナキスト、あるいは、むしろアナキストの活動に関する何気ない会話において、ある友人がいったわずかな言葉から思い浮んだものである。この話がどうしてもち出されたかは、今おぼえていない。⁽¹⁾

コンラッドは、さらに続けて、アナキストに対する彼の立場をかなり明確にしなが、次のように述べている。

しかし、アナキストによる犯罪の無意味さについて、主義、活動、心情について、また常に悲劇的なまでに自己破壊に熱心な人間の痛ましい惨めさや情熱的な軽信を利用しようとする厚顔な欺きに見られるような、気違いじみた軽蔑するべき態度について語ったことは憶えている。これこそ、アナキスト哲学の主張を私にとって許しがたいものとした点である。⁽²⁾

この「序文」の「友人」('omniscient friend')が、フォート・マドックス・フォード (Ford Madox Ford, 1873—1939) であることは、フォード自身が認めているが、⁽³⁾コンラッドとフォードは、この会話において、アナキスト活動の具体例として、1894年2月のグリニッジ天文台爆破未遂事件 (the Greenwich Bomb Outrage) を想起した。この事件は、コンラッドによれば、「理性的にせよ、非理性的にせよ、思考という過程によって、その動機を推測することは不可能であるほど愚かな、血まみれの虚しい活動」⁽⁴⁾である。

私の友人は、しばらく黙っていたが、それから、彼特有の何気ない、全てを知りつくしているかのような調子でいった。『あゝ、その男は白痴だったんですよ。彼の姉は、のちに自殺しました。』私たちの間で交された言葉は、これだけだった。というのは、私はこの思いがけない情報にすっかり驚いてしまって、しばらく言葉が出なかったからであり、また彼がすぐに別の話題に移ったからである。彼が、この知識をどのようにして得たかとたずねることは、のちにも、私には思いつかなかった。もし彼がアナキストの後姿を一度だけ見たことがあったとしたら、それがアナキストの世界についての彼の全てのかかわりであったにちがいないと、私は確信している。しかし、彼は、あらゆる人間と話すのが好きな男であったので、この真相解明に役立つ事実を、街頭掃除人か、退職した警官か、クラブの誰か得体の知れない人間から、あるいは、もしかすると、私的あるいは公的⁽⁵⁾なレセプションで会った国務大臣あたりから得たのかもしれない。

コンラッドは、『密偵』の場合、この「友人」フォードの話から暗示を得たことを間違いなく認めながら、彼から得た具体的知識は少ないことを明確に述べており、フォード自身もアナキストについての知識は限られたものであったことを示唆しているが、この点については後述する。

さらに、コンラッドは、彼を刺激して、想像力をかき立てる起縁となった1冊の本について語っている。それは、アンダソン (Anderson) という名のある警察副署長 (Assistant Commissioner of Police) の回想録であると述べ、そのなかで、ある思いがけないダイナマイト事件ののち、アンダソンが、下院のロビーで当時の内務大臣 (Home Secretary) のサー・ウィリアム・ハーコート (Sir William Harcourt) と交している短い対話に心を惹かれたと語っている。⁽⁶⁾

コンラッドが言及している書物は、サー・ロバート・アンダソン (Sir Robert Anderson) の *Sidelights on the Home Rule Movement* (London, 1906) ⁽⁷⁾ であり、アンダソンのもうひとつの著作 *The Lighter Side of my Official Life* がコンラッドの蔵書に含まれていた⁽⁸⁾ので、この問題の本も多分あったであろうと推測される。サー・ウィリアム・ハーコートは、1880—85年にグラッドストーン (Gladstone) の内閣の内務大臣を務めており、『密偵』の内務大臣サー・エセルレッド (Sir Ethelred) にあたるのであるが、彼は、在任中、フィニア会ダイナマイト爆破事件 (the Fenian dynamite outrages) に対処しなければならなかった。ロバート・アンダソンの著作には、やはりフィニア会の陰謀の裏をかくために、警察のスパイが使われていたことについての記述がある。⁽⁹⁾ また同書には、コンラッドの興味を引いたサー・ウィリアム・ハーコートの言葉 “All that’s very well. But your idea of secrecy over there seems to consist of keeping the Home Secretary in the dark.” ⁽¹⁰⁾ に対応する “Anderson’s idea of secrecy is not to tell the Secretary of State.” ⁽¹¹⁾ があることが指摘されている。

しかし、サー・ロバート・アンダソンは、警察副署長ではなく、ハーコートが内務大臣在任当時の警察副署長は、サー・ハワード・ヴィンセント (Sir Howard Vincent) ⁽¹²⁾ であった。イギリスの伝統的な政治家の典型であるサー・ウィリアム・ハーコートは、『密偵』では、⁽¹³⁾ ‘the Great Personage’ と警察副署長の両方に描かれているといえよう。

コンラッドが『密偵』の中心事件の素材にグリニッジ天文台爆破未遂事件というアナキストによる実際の事件を使用するに当っては、この事件に関する12年前の新聞記事を利用した。この事件は、当時、世間の耳目を大いに驚かしたのであるが、マルシャル・ブールダン (Martial Bourdin) というアナキストがグリニッジ天文台爆破を企図したけれども、天文台付近のグリニッジ公園で、事故によって、自ら爆死した事件である。ブールダンの姉の夫

サミュエルズ (H. B. Samuels) は、アナキストとして知られた男で、悪名高いアナキスト新聞の編集者であったが、その新聞は、『密偵』で、ヴァーロック (Verloc) が、彼の店で売っているような「たいまつ」 (The Torch), 「ゴング」 (The Gong) などの「威勢のいい題名で、印刷の粗悪な、いかがわしい新聞の、どう見ても古い号がいくつか置かれている⁽¹⁴⁾」と描かれている種類の新聞であったと考えられる。「アナキスト」 (Anarchist) という当時のアナキスト新聞がコンラッドの素材の一部になったことが推測⁽¹⁵⁾されている。

もちろん、当時は「モーニング・リーダー」 (Morning Leader) や「タイムズ」 (The Times) のような新聞も、この爆破事件を詳細に報道しており、コンラッドは、これらの記事を読んだにちがいない。爆破事件前後の1894年1～2月には、コンラッドは、ロンドンのジリングガム街17番地 (17 Gillingham Street) に住み、『オールマイアーの阿呆館』 (Almayer's Folly) を執筆中であったはずである。

爆破事件ののち、サミュエルズは、犠牲者の義理の兄として、新聞からインタビューを申し込まれたり、また自ら「公衆の福利」 (Commonweal) というアナキスト雑誌に、ブールダンの追悼記事を書いたりした。ヴァーロック、ウィニー (Winnie)、スティーヴィー (Stevie) をめぐる『密偵』における人間関係は、実際の事件の状況とよく合致している。とくに、サミュエルズが、指導的なアナキストであったこと、また彼が警察のスパイであると考えられていたことが、コンラッドの『密偵』の主題を示唆したものと考えられる。アジャン・プロヴォカトゥール (agent provocateur) と呼ばれた挑発・扇動を目的とする警察の回し者 (2重スパイであることもあった) の存在は、世紀末ヨーロッパの最も陰鬱な時代相を物語るものである。

これに関連して興味深いのは、コンラッドが、1907年10月7日付書簡⁽¹⁶⁾で、カニングラム・グレアム (R. B. Cunninghame Graham) 宛「ウラジミル氏 (Mr. Vladimir) は、パドレフスキ (Padlewski) が、(パリで)90年代に射殺したあの不埒なセリヴェルストフ将軍 (General Seliwerstow) によって思いついたこと」を述べている点である。この将軍は、おそらく、ロシア政治警察の皇帝官房第三部 (the Third Section) の部長として、パリで公安関係の情報員を務めていたらしい人物である。パドレフスキは、彼をホテルの部屋で銃撃したのち、姿を消した。その所在については、さまざまな憶測が行われたが、フランス警察は、行方をつきとめる気持はなかったらしい。この

事件は、「タイムズ」紙1890年11月19日付で報道されている。⁽¹⁷⁾

さて、フォードが、エドワード・ガーネット (Edward Garnett, 1868—1937) の紹介によって、コンラッドと協力したのは、1898年より、1909年までの約10年間であり、コンラッドが、「無政府主義者」、「密告者」および『密偵』を執筆した期間に相当するために、『密偵』についても、フォードの次のような主張が生まれた。

『密偵』の小さな部分、つまり、ところどころの文章、そのほとんどは、コンラッドが全然知らなかった西ロンドンの地誌や警官やアナキスト⁽¹⁸⁾についての詳細であるが、これは私が書いたものである。

この期間にフォードがコンラッドに種々の情報を提供したことは、1905年10月20日付コンラッドのウェルズ (H. G. Wells) 宛書簡によっても知られるが、⁽¹⁹⁾他方、コンラッドは、「序文」において、次のように述べている。

環境を描くためには、ヒントが不足していなかった。私は若い頃、夜のロンドンの街の至るところを、ひとりで歩き回ったが、その時代の記憶が、この物語の頁のなかに侵入してきて、圧倒してしまうことがないよう⁽²⁰⁾に、その記憶を遠ざけておくように努力しなければならなかった。

フォードのアナキストの世界についての知識は、コンラッドが述べているよりも深いものであったと考えることは可能であるが、この点については、彼の経歴をふり返る必要がある。フォードは、1873年、サリー (Surrey) 州マートン (Merton) に生まれ、フォード・ハーマン・ヘファーと名づけられた。のちに、彼は、さらにジョウゼフ・レオポルド・マドックスを、クリスチャン・ネームとして付け加えている。父はドイツ人で、フランツ・カール・クリストーフ・ヨハネス・ヒュファー (Dr. Frantz Carl Christoph Johannes Hüffer) といったが、1869年にイギリスに移住し、姓名もイギリス風に、フランシス・ヘファー (Francis Hueffer) と改めた。(この姓は、彼自身はフーファーと読ませたらしい。) 彼は多彩な関心の持主で、哲学者としては、ショウペンハウアー (A. Schopenhauer) の、音楽学者としては、ヴァーグナー (R. Wagner) の研究者として知られ、イギリス移住ののちに、それぞれ、ショウペンハウアーとヴァーグナー研究のための雑誌

The New Quarterly と *The Musical World* を発刊している。彼は、ヴィクトリア時代の有名な画家フォード・マドックス・ブラウン (Ford Madox Brown, 1821—93) の娘キャサリン (Catherine Emma Brown) と1872年に結婚し、翌73年に、Ford が誕生した。従って、フォード・マドックス・ブラウンは、フォードの母方の祖父であり、この祖父を通じて、フォードは、ラファエル前派 (the Pre-Raphaelites) の詩と絵画の世界へつながり、その芸術的雰囲気の影響のもとに成長した。フォードの母は、ウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti, 1829—1919) の義理の姉妹にあたる。ウィリアム・ロセッティは、ラファエル前派の著名な詩人ダント・ゲイブルエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828—82) の弟であり、クリスティーナ (Christina Georgina Rossetti, 1830—94) の兄であり、芸術批評家として、兄妹の詩集・書簡集の編集に尽力した。彼の3人の子供たち、アーサー (Arthur)、オリーヴ (Olive)、ヘレン (Helen) は、フォードのいここにあたる。フォードが 'my juvenile relatives'⁽²¹⁾ と呼ぶこの3人は、1890年代、つまり彼らが10代 (アーサー14歳、オリーヴ16歳、ヘレン12歳) のころに St Edmund's Terrace の家の地下室でアナキスト新聞の印刷所を設けていたことで知られる。このアナキスト新聞は、*The Torch: A Revolutionary Journal of Anarchist Communism* と呼ばれた。⁽²²⁾ とくにヘレン・ロセッティは、その美貌によって知られたが、コンラッドが、『密偵』やアナキストに関する短篇を執筆する以前に、彼に2回会ったことを話しており、⁽²³⁾ 「密告者」の若いアナキスト女性 ('the anarchist young lady') のモデルとなった。彼女は、後年、*Pre-Raphaelite Twilight* (London, 1954) を書いている。

フォードは、1889年の父の死後、Regent's Park の住居 (1 St Edmund's Terrace) に暮したが、これは、ウィリアム・ロセッティの住居 (3 St Edmund's Terrace) のほとんど隣りであった。このロセッティの家は、コンラッドが、「密告者」に描いている家であるが、フォードが、コンラッドはロセッティ家の娘のひとりと彼らのアナキスト新聞を『密偵』に描いたといっているのは、もちろん「密告者」の誤りである。⁽²⁴⁾

さらに、フォードの妹の回想によれば、オリーヴとアーサーが、大部分の記事を書き、日曜日に、ハイド・パークや大きな鉄道駅のプラットフォームで、新聞を販売したという。⁽²⁵⁾ また、「密告者」の若いアナキスト女性が、イタリア語やフランス語のアナキスト出版物を校正しているように、ロセッ

テイ家には、彼らの出身の関係から、イタリア人のアナキストたちが多数集まった。後年、フォードがコンラッドをヘレン（彼女が20歳のころ）に紹介したのであろう。ヘレンは、クロポトキン公爵（Prince Kropotkin, 1842—1921）の *An Appeal to the Young* というパンフレットを読んで、アナキスト思想に傾倒し、兄姉をこの思想へ導いたといわれる。彼女は、また、マルシャル・ブールダンを個人的に知っていた。

『西欧の眼のもとに』は、ロシア帝政末期におけるアナキズムを背景としているが、この作品のリチャード・カール（Richard Curle, 1883—1968）の所有する本の書き込みとして、コンラッドは、「ジュネーヴで何年も前に出会ったある人が語ってくれたあること〔ラズモフ（Razumov）の運命〕と、雑誌に発表されているロシアの革命家たちについての物語のつまらなさによって、私はこの小説を書く気持になった⁽²⁶⁾」と述べている。

コンラッドは、彼の作品を最も早く認めてくれたエドワード・ガーネット（Edward Garnett, 1868—1937）とは、長らく、最も親密な友人関係を保っていたが、ガーネットの妻コンスタンス（Constance Garnett, 1861—1946）とも親しい友人であった。コンラッドが、ロシアの革命運動について多くの知識を得ることができたのは、まず第一は、ガーネット夫妻との交友を通じてであった。ガーネットは、ドストエフスキーやツルゲーネフに精通した当時の最も優れたロシア文学の理解者であり、後年、『ツルゲーネフ』⁽²⁷⁾（*Turgenev*, 1917）を著し、コンラッドが序文を寄せることになる。コンスタンスは、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、チェホフ、ゴーゴリ、トルストイらロシア文学の多くの作品の翻訳者として有名であり、またロシア問題への関心によって、‘Russophile’として世間に知られ、ガーネット夫妻の邸宅 ‘the Cearne’ において、彼女の周囲には、ロンドンに居住する幾人かの亡命ロシア人たちがグループを形成し、その多くは著名なアナキストや社会主義者として知られた人物たちであった。

こういうわけで、コンラッドが『西欧の眼のもとに』を執筆していた時期（1907—11年）には、彼自身は苦心して拒絶しようとしていたあらゆるロシア的なものが、ガーネット夫妻との交際を通じて、コンラッドに迫り、彼は否応なしに、これと直面しなければならなかったのである。ロシアという現実には、彼にとっては、いわば強迫観念となっていたということが出来る。当然、彼は、ガーネット夫妻の交際範囲にいるこれらのロシア人亡命者たちを

拒絶することによって、ロシア的なものから距離を保とうと努力した。このため、ガーネットとコンラッドの交友関係は、多少冷却した時期もあった。とくに、ガーネットは、終始、コンラッドを 'a Slav' と位置づけるのであったが、これはコンラッドが承認できないことであった。

『西欧の眼のもとに』が出版されると、ガーネットは、「ネーション」(Nation) 誌 (1911年10月21日付) で匿名批評を發表し、ナタリー・ハルディン (Nathalie Haldin) を「ロシア女性のこのすばらしいタイプ⁽²⁸⁾」と呼び、同時に「この小説の芸術的強烈さは、特徴的なロシア人のタイプの顕著な描写にあるというよりも、暗い国民的背景の雰囲気の効果にある」と評した。しかし、このガーネットの鋭い批評は、コンラッドを傷つけるものであった。また、コンスタンスが、ナタリーを「あまりにも生気がない」('too wooden') と批評したのに対し、コンラッドは、次のように答えている。

実は、私はロシア人のことは、ごくわずかししか知らないのです。ほとんど何も知りません。ポーランドでは、私たちは彼らと何の関係もありません。ロシア人がいることは知っています。そして、それだけで十分不快なことなのです。……あなたがご覧になったにちがいない本で、私はもっぱら思想に関心を持ちました。⁽²⁹⁾

そして、ナタリーについては、筋を展開するための旋回軸 (pivot) として、彼女を必要としたと述べている。つまり、ナタリーをより生彩ある存在に描いたならば、この作品で目指した芸術的目的であるひとつのムードの展開という面で成功しなかったであろうというのである。コンラッドとガーネット夫妻の間のロシアをめぐる微妙な軋轢が、この書簡に感知できるのである。

『西欧の眼のもとに』に描かれた情況の背景は、当時のロシアの現実を密接に反映していることは、コンラッドが小説の冒頭で述べているところである。1890年代のロシアでは、社会革命党 (the Socialist Revolutionary Party) とそのテロ組織が活動し、他方、学生の間で革命グループが組織されていた。これに対し、ツァーを頂点とするロシア政府は、普通の警察の外に、特殊な公安警察 (憲兵隊) をもち、これは1880年までは皇帝官房第3部長官の指揮下にあったが、1880年以降は、普通の警察を配下に置いていた内務省の管轄となった。公安警察は、アジャン・プロヴォカトゥールをはなれて、

革命グループの陰謀を摘発しようとした。この公安組織は「オフラーナ」(Okhrana) と呼ばれた。

ガーネット夫妻が当時交際していた亡命ロシア人のなかには、クロポトキン公爵をはじめ、フェリクス・ヴォルホフスキー (Felix Volkhovsky)、ニコライ・チャイコフスキー (Nikolai Chaikovsky)、チェルケソフ公爵 (Prince Cherkesov)、セルゲイ・ステプニャーク (Sergey Stepniak) の名で知られたクラフチンスキー (S. M. Kravchinsky) らがいた。

ステプニャークは、その著作『ツァー権力下のロシア』 (*Underground Russia*, 1883) によって知られるが、1878年8月4日の白昼セント・ペテルスブルク市街で、散歩中の政治警察長官メゼンツェフ将軍 (General N. V. Mezentsev) に馬車で追いついて剣の一突きで暗殺し、そのまま馬車で逃亡し、ロシアからの脱出に成功した人物である。⁽³⁰⁾ 彼は、イギリスに定住したが、1895年に鉄道踏切を横断中に事故死した。デイヴィッド・ガーネットによれば、ステプニャークは意志の力で耳を聞えなくする能力を有し、そのため機関車の接近を聞いていなかったという。⁽³¹⁾ ステプニャークが、ラズモフの部分的なモデルであることは推測できるのであり、とくにラズモフが電車で轢かれる事故のヒントは、ステプニャークの事故死にあるといえるかもしれない。

『西欧の眼のもとに』の主要事件であるハルディン (Victor Haldin) によるド・P氏 (Mr de P—) 暗殺は、コンラッドのゴールズワージー宛1908年1月6日付書簡で明らかにされているように、⁽³²⁾ イゴール・サゾノフ (Igor Sazonov) によるプレーヴェ (V. K. Plehve) 暗殺 (1904年7月28/15日) に基いている。プレーヴェは、1846年リトアニア系の家系に生まれ、ワルシャワとセント・ペテルスブルク大学に学び、のちにロシア政府の中枢で昇進し、アレクサンドル2世暗殺 (1881) の捜査でアレクサンドル3世に認められ、ポーランドやリトアニアのロシア化 (Russification) 政策を苛酷に推進して憎悪を買い、ウィッテ (S. Y. Witte) の西欧的政策の反対者でもあった。1902年に内相となり、専制政治の権化として革命運動に冷酷で狂信的な弾圧を加えていた。サゾノフはモスクワ大学学生であったが、ツァーへの定期的報告に向う途中のプレーヴェの馬車の中へ爆弾を投げ込んで、彼の暗殺に成功したが、自身はその場で逮捕され、有名なシュリュッセルブルク (Schlüsselburg) 監獄に監禁されたのち、別の監獄で、当局の一囚人に対する虐待に抗議して自殺した。プレーヴェ暗殺は、翌年のニコライ2

世の叔父セルゲイ大公 (Grand Duke Sergei) の暗殺 (1905年2月17/4日) とともに、帝政末期のテロリズムの歴史で最も顕著な事件として知られる。

プレーヴェ暗殺は、ロシアのあらゆる階層に衝撃を与えたばかりでなく、全ヨーロッパに大きな印象を与えるものであった。当時のロシア政界における政府と革命勢力の間のさまじい事件は、イギリスの新聞に詳細に報道されているが、プレーヴェ暗殺事件も「タイムズ」紙の1904年7月29日付以後で報道されており、コンラッドもその詳細を承知していたであろう。

『西欧の眼のもとに』の「殺し屋」ニキタ (Nikita) が、帝政末期のロシア政治史において悪名高い2重スパイのイエフノ・アゼフ (Yevno Azev [Ebno Aseff]) に基くことはほぼ確実である。アゼフは長年にわたって公安警察「オフラーナ」に雇われたスパイとして社会革命党の中枢に浸透して、革命家グループのなかでテロリストの指導者となり、政府高官の暗殺を組織しながら、その機密を政府に通じて多数の同志を売り渡した。ニキタの正体が暴露される経緯は、アゼフのそれと酷似している。つまり、ミクーリン顧問官 (Councillor Mikulin) は、⁽³³⁾ ⁽³⁴⁾ ベインズやカールが示唆しているように、当時のリベラルな警察庁長官であったロープヒン (A. A. Lopuhin) に基くと考えられるが、ロープヒンはプレーヴェに抜擢されて、37歳で警察庁長官となり、のちにセルゲイ大公暗殺の責任を問われて辞任した人物である。彼は、政府が政情不安を引き起こすために、アジャン・プロヴォカトゥールを使っていることに衝撃を受け、汽車の中で、ジャーナリスト・歴史家であるブルツェフ (V. L. Burtsev) に、イエフノ・アゼフなる人物が公安警察に雇われたスパイであることを暴露した。ブルツェフは社会革命党員であり、革命家グループとは密接な関係をもつ人物であったが、かねてアゼフを裏切者と信じて弾劾し、その正体暴露に献身していたのである。

ロシア政府は、この暴露に衝撃を受けたが、問題は表面化して国会 (Duma) で論議され、ロープヒンは、アゼフに関して社会革命党員に機密を漏洩したという理由で懲役刑を宣告され、シベリア流刑に処せられた。この事件は、1909年1月16日以降「タイムズ」紙で詳細に報道された。1909年といえば、コンラッドが『西欧の眼のもとに』の執筆を開始したのは1907年であるから、4年間にわたる執筆期間の中頃にあたる。ミクーリン顧問官とロープヒンの運命の類似点も明白であろう。

さらに、T将軍 (General T-) を悪名高いトレポフ将軍 (General D.

F. Trepov) に比定することができる。彼は、1905年1月22/9日のペテルスブルク事件（「血の日曜日」 'Bloody Sunday'）ののち、ペテルスブルク知事に任命され、冷酷な弾圧をもって臨み、セルゲイ大公暗殺後は政府の中心人物の一人であった。さらに、もうひとり、1878年にヴェラ・ザスリッチ (Vera Zasulich) がピストルで命をねらって失敗したペテルスブルク知事トレポフ将軍 (General F. F. Trepov) がいる。彼は、オペラその他の芸術の保護者を気取ってはいたが、その残虐さによって、当時、セント・ペテルスブルクで最も嫌悪されていた人物であった。

コンラッドの革命家に対する嫌悪感は、ピーター・イヴァノヴィッチの戯画化された人物像に最もよく表わされている。彼の感傷的フェミニズムは、クロポトキン公爵に対する揶揄とも受け取られ、またバクーニン (Mikhail Bakunin, 1814—76) を想起させる特徴も指摘することができる。ベインズは、この人物が、トルストイ (Leo Tolstoy, 1828—1910) を風刺したものであるかもしれないとし、両者の主張する理想の類似点と私生活のむさくるしさという共通点を指摘している。⁽³⁵⁾

要するに、コンラッドが描いたアナキスト像の背景をさぐることによって感知される彼のアナキストへの態度は、揶揄と冷笑を特色とし、それが『密偵』と『西欧の眼のもとに』において、作者の事実に対する超越した姿勢となって独自のアイロニーを生んだ点は、コンラッドの政治に対する視点全般を考える場合に無視できないであろう。

注

- (1) *The Secret Agent*, p. ix. 以下、本稿における Conrad の作品への言及はすべて Dent Collected Edition による。
- (2) *Ibid.*, pp. ix—x.
- (3) Ford Madox Ford, *Joseph Conrad: A Personal Remembrance* (1924), p. 231.
- (4) *The Secret Agent*, p. x.
- (5) *Ibid.*
- (6) *Ibid.*, p. xi.
- (7) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography* (1960), p. 331; Abrom Fleishman, *Conrad's Politics* (1967), p. 213; Norman Sherry, *Conrad's Western World* (1971), p. 287 参照。
- (8) Baines, p. 482 参照。

- (9) *Ibid.*, p. 331 参照。
- (10) *The Secret Agent*, p. xi.
- (11) Robert Anderson, *Sidelights on the Home Rule Movement*, p. 89 (Baines, p. 331 参照)
- (12) Sherry, *ibid.*, p. 288 参照。
- (13) Fleishman, p. 213 参照。
- (14) *The Secret Agent*, p. 3.
- (15) Sherry, *ibid.*, p. 229 参照。
- (16) Jean-Aubry, G. *Joseph Conrad: Life and Letters* (1927), Vol. II, p. 60.
- (17) Baines, pp. 331 & 482 参照。
- (18) Arthur Mizener, *The Saddest Story: A Biography of Ford Madox Ford* (1971), p. 114 参照。
- (19) Jean-Aubry, Vol. II, p. 25.
- (20) *The Secret Agent*, p. xiii.
- (21) Ford Madox Ford, *Return to Yesterday* (1931), p. 108.
- (22) Ford, *Joseph Conrad*, p. 231.
- (23) Sherry, *ibid.*, p. 213.
- (24) Eloise Knapp Hay, *The Political Novels of Joseph Conrad* (1963), p. 227 参照。
- (25) Juliet Soskice, *Chapters from Childhood* (1921), p. 4.
- (26) Notes in Curle's copy.
- (27) 'Turgenev', *Notes on Life and Letters* (1921).
- (28) Norman Sherry (ed.), *Conrad: The Critical Heritage* (1973), p. 238.
- (29) Edward Garnett (ed.), *Letters from Joseph Conrad 1895—1924* (1928; Charter Books, 1964), pp. 234 - 35.
- (30) Edward Crankshaw, *The Shadow of the Winter Palace* (1976), pp. 261 - 62 参照。
- (31) David Garnett, *The Golden Echo* (1953), pp. 10 - 20 参照。
- (32) Jean-Aubry, Vol. II, p. 64 参照。
- (33) Baines, p. 371 参照。
- (34) Frederick R. Karl, *Joseph Conrad: The Three Lives* (1979), p. 679 参照。
- (35) Baines, p. 372 参照。